

ふるさと佐渡の地域活動に学ぶ

佐渡島の北部、海府地区では「佐渡海府寒ぶり大漁祭り」など、さまざまな活動に取り組んでいる。まずは小さな一歩から、地域を知り、地域の人々との対話からことを起こしてきた軌跡を紹介。

鷺崎わづきというところ

私の住む佐渡市鷺崎は、佐渡島の北部、「海府」と呼ばれる地域のなかでも北端に位置します。近くには、二匹の亀が寄り添っているように見える「二ツ亀」があり、夏には多くの方が訪れる透き通った海と雄大な景観をもつ「二ツ亀海水浴場」、そしてその隣には、カンゾウの花が群生し、初夏には三五万株ともいわれるカンゾウの黄色の花が咲きほこり、六月上旬に「カンゾウ祭り」が催されます。日本三大巨岩の一つといわれる、標高一六七メ

ートルの頂上まで切り立った一枚岩壁の「大野亀」があり、訪れる人の目を楽しませてくれます。

生活といえば、半農半漁が多く、近年では佐渡の中心部に職を求める者もいますが、島を離れていく人が多い状況です。農業は、急峻は地形のため規模は小さく、中山間地特有の労力がかかる割りに成果が少ない。一方、漁業といえば、磯漁、大型定置網、小型定置網などがあります。かつては「寒ブリ」の大漁で多くの人が大型定置網に従事していた時期もありましたが、少子高齢化にともない、後継者不足などの切実な問題をかかえています。農業

にしても漁業にしても、出口の見えないトンネルの中にいるような気がしています。

観光客数は、平成三年をピークに右肩下がり。現在はピーク時の半分近くまでに減少し、対応策に苦慮しているところです。鷺崎への交通手段は、昭和四五年ごろまでは船で、その後バスが通るようになりましたが、まだまだ道路幅は狭く、車の離合もままならない状況です。

公民館活動への参加

昭和五五年、大学卒業と同時にふる

さとに帰り、以来建設業に携わってききました。早々に公民館役員になることを薦められ、集落の一員になるきっかけとなりました。組織は分館長、副分館長二人、ほかに役員八人で、地域における諸団体との連携を図り、いきいきとした地域づくりの援助に努めることを目標に活動することとなりました。お年寄りから子どもまでと範囲は広く、大変なこともありましたが、人に関わる大切さをはじめ、いろいろ教えられることが多かったように思います。

私の小学校のころは、小正月（一月一五日）には、正月にお飾りした門松などを持ち寄って燃やし、その炎で餅やイカなどを焼きながらその煙にあたることで無病息災を願う「どんど焼」という行事がありました。かつてほどの賑わいはありません。他にも行事は行われているのですが、参加人数が少ないせいか盛り上がりに欠けているようにも感じられました。これも時代の流れのなかで仕方ないと思っていました。

「鬼太鼓保存会」に入会して

そんなある日、「鬼太鼓保存会」に入会の誘いがありました。しかし、家に帰って来たばかりで、仕事もよく分からぬ状態だったので、あれもこれもというわけにもいかず、一度は断つたものの先輩たちの熱い気持ちに負けて入会させていただくことになりました。

鬼太鼓は、佐渡にしかない珍しい古典芸能で、島内各地にそれぞれ独自の様式で伝承されています。勇壮な太鼓にあわせて鬼が狂ったように舞うのでこの名があり、佐渡では「おんでこ」と呼ばれています。悪魔を払い、豊年や大漁を祈念する神事芸能です。

鷺崎集落も昭和二六年、親戚を通じて佐渡の中央にある新穂から指導者を招いて教えていただき、それから集落の祭りには、一軒一軒門付けをして朝早くから夜遅くまで、その家の繁栄を願って舞っております。当時、若い人

たちの交流と団結を目的に結成され、今日に至っていると聞いておりますが、昭和五五年ころには後継者不足から会の存続も危うい時期もあつたようです。

若い人の集いの場「シタダミ会」

公民館や鬼太鼓保存会の活動を行っているなかで、どうしても先輩の方と一緒に活動になっていくためか、若い人たちの存在感が薄いような気がしました。次の世代を担うのは自分たちなのに、このままでいいのかという疑問が頭をよぎることが多くなってきました。過疎が進み、産業が衰え、集落に元気がなくなってきたように感じました。当然子ども的人数も少なくなり、保育園が統廃され、小学校の複式学級が予測されるなかでも、何一つ妙案が浮かびません。

そんな時、似たような年ごろの仲間数人と酒を飲む機会があり、話のなかで「昔は泳いでサザエ獲つたよな」とか、「もつと道路が良くならんかな」

「病院が近くにあるといいな」など、いろいろな意見が出て来ました。若い人たちが気楽に集まれて、夢が語れる場が必要なことは、皆に共通する認識でした。即刻、会を発足することになりました。会の名前は、付近の海にどこにでもいる巻貝からとって「シタダミ会」とし、最初は一〇人の会員から出発することに。

「集落や地域のいいところを発見していこう」「子どもたちに、ここで生まれたことを誇りに思わせたい。そのためには、まず自分たちでできることから始めよう」ということになり、七月下旬の日曜日を子どもたちを交えてのバーベキュー大会の日として活動の第一歩を踏み出したのです。

しかし、バーベキュー大会をするにしても、食材のサザエなどは地元の漁師さんから分けてもらわねばなりません。当時、泳いでサザエなどを獲ることが禁止されていたからです。子どもたちは、ただ泳ぐだけが海での体験でした。海で育つはずの子どもにも、サザ

エやアワビがどこに、どのようしてあるのか教えてやることができなければ、海に対しての興味も薄れてしまう。「サザエはどこにあるの？」って聞かれたら「家の冷蔵庫にあるよ」という子どもになってしまいます。そこで、地元の漁師さんや集落区長さんと二年間にわたる交渉の末、理解をしていただきました。一日限りではありませんが海を開放してもらい、監視には会の大人が付き、子どもたちと楽しい一日を過ごさせていただいています。

子どもたちの様子を見ると、サザエの大きさをくらべをしたり、何メートル潜ったなどと競いあったり、自分が獲ったサザエをお父さんにあげたり、他のおじさんにあげたりと、楽しく過ごしているようです。

また、会ではボランティア活動として、年一回ではありますが、集落内の市道の草刈り作業を行っています。毎週日曜日とは限りません。朝五時ごろから始めて、出勤時間まで作業をしている年もありました。

ある時は、鷺崎から車で五〇分ほどの夷商店街えびすの祭りで仮装大会があり、会が中心となって参加者を募り、出場して優勝を経験することができました。目的は、優勝賞金もありますが、やはり「度胸試し」であります。

佐渡海府寒ぶり大漁祭り

「佐渡海府寒ぶり大漁祭り」、この企画は、鷺崎を含む海府地区の若者による地域おこしです。海府一帯は佐渡一の風光明媚な地域であり、人情も厚く、自然が厳しいがゆえに魚介類はより美味しさを増し、とくに寒ブリは佐渡の冬の味覚を代表するものです。

現在、大野亀で開催される六月の「カンゾウ祭り」が佐渡を代表する祭りになっていますが、味覚の面からも脂ののった寒ブリを多くの人たちに食べていただき、地域のことを語り合ってもらいたい、との思いから始まったものです。

海府という地に住み、その土地固有



ニツ亀の海岸清掃活動。



佐渡に伝わる神事芸能
「鬼太鼓」。



大野亀とカンゾウの花。

大きな寒ブリを手にと
うれしそうなおもたち。



「寒ぶり大漁祭り」で
行われる寒ブリレース。



「シタダミ会」で開催したバーベキュー。

の自然や生活条件を知り、次世代を担う若者たちが住み良いと考え、自らも考えられる意識をもつことが活性化を生み出します。それは、自らが行動することにより生まれるものです。多くの人々の意思を一つにすることも重要です。そのためには、まず「対話あり」から出発することが大切であると思います。

ともかく、やってみる。そのなかで、地域の人々が海府の将来を考え、そして自分がどう行動するかを考えていけたら、すばらしく元気のある地域になるのではないか。そんな思いから、平成八年九月九日、世話人三人で「佐渡海府寒ぶり大漁祭り実行委員会」を立ち上げました。人集めのために海府地区九集落、漁協、地域内の事業所などから賛同を得て、組織づくりに始まり日程、演出……と会議を重ねていったわけですが、なにせ初めてのことなので、後戻りもあり多くの方々にご迷惑もおかけしました。

第一回目は、平成八年二月一日

(日)、プレイベントとして鷺崎漁港内の漁協倉庫を会場に行いました。まず、自分たちが楽しむことに主眼をおき、一〇〇人程度の来場者を考えていましたが、フタを開けてみると三〇〇人余りの人、人、人。当然、用意した「ブリづくし弁当」のセットをはじめ、水揚げされたばかりの寒ブリ、鮮魚、海藻、地元の野菜などもほぼ完売し、関係者は楽しむどころか昼食も食べられなかったという活況ぶりでした。

祭りの最大の目玉は、直径五メートルの水槽に当日水揚げしたブリを泳がせ、それらを買ってもらうことです。また、長さ二五メートルの水槽に三匹のブリを泳がせて順位を競う「寒ブリレース」、漁具を使つての「漁場オリンピック」、地元民謡、子ども鬼太鼓などで楽しんでもらいます。

この祭り、寒ブリが獲れないと話になりません。開催当日がシケ模様だと出漁できるかどうか、漁船の漁労長との間に数十分にもおよぶ沈黙の時間があつたり、出漁できても網に肝心のブ

リが入っているかどうかなど、胃が痛くなることの連続でした。毎年のごとはありますが、生き物を使って実施する祭りの難しさを身にしみて感じています。

終了後、反省会を開き、関係者に次回からの開催について意見を求めたところ、全員一致で続けて開催することとなり、現在も毎年一二月の第一日曜日に開催しています。これまでに二回、当日にブリの水揚げがない年がありました。したが、毎年二〇〇〇人前後の方々が来場されるようになり、出展する側にも年々工夫が見られ、地元の宝さがしに懸命です。五〇人のスタンプからのスタートでしたが、いまでは一〇〇人余り、当初の倍の規模となりました。内海府、外海府の壁を越え、地域の人たちの気持ちのベクトルを合わせると、偉大な力が発揮できることに気づきました。

この祭り、三年目からは「海府未来塾」の事業部会が担当することとなりました。未来塾では、ほかにも二ツ亀

まどがしま
佐渡島 data

新潟市の西約45kmの日本海にある国内最大の離島。面積854.88km²、周囲262.7km、人口67,502人（平成19年3月現在）。万葉の時代から「遠流」の地に定められ、北前船の寄港地としても発展、世界有数の産出量を誇る金銀鉱山が江戸末期まで幕府の財政を支えるなど、数奇な歴史背景から独自の文化を形成してきた。能楽や鬼太鼓、文弥人形など芸能も盛ん。産業は観光業、水産業のほか、離島でありながら県内でも有名な米どころであり、おけさ柿の産地でもある。平成16年3月に1市7町2村が合併、1島で佐渡市が誕生した。



山口栄一郎 (やまぐち えいいちろう)

昭和31年新潟県両津市（現佐渡市）に生まれる。大学卒業後帰郷し、建設業に従事。平成10年、代表取締役役に就任。昭和55年より公民館役員、鷲崎鬼太鼓保存会入会。シタダミ会会長を務め、平成8年に発足した「佐渡海府寒ぶり大漁祭り実行委員会」委員長に就任。2年後、会が海府未来塾事業部に移管されると同時に同塾の委員長。

海岸の清掃、カンゾウの増殖ボランティアなどを奉仕部会が担当し、講演会などを担当する勉強部会と大きく三つの部会に分けて、地域おこし活動を続けていくところです。

人も元氣、自分も元氣、
そして地域も元氣

平成一六年三月一日、島内の一市九町村が合併して佐渡市が誕生しました。市役所本庁は佐渡の中央に置かれ、私

たちの地域はさらに行政からの目が届かないのではないかと、という不安はありますが、地域の人々の意思を一つにすればその不安も解消されていくと信じています。自分たちのできることから一歩ずつ、という気持ちでいけば、一人ひとりが元氣になると思います。また、私たちに与えられたこのすばらしい自然を大切に守っていく必要があるようにも思います。市の花「カンゾウ」、市の魚「ブリ」、いずれも私た

ちのすぐそばにあります。一八年には二ツ亀海水浴場が「日本の快適水浴場百選」に選ばれました。このような資源を生かすのは私たち自身だと思っています。チャンスは必ずあります。挑戦していこうという気持ちさえ持ち続けていれば……。

人が生き生きとし、美しい自然環境に囲まれた地域は、当然元氣になるはず。そんな地域であり続けるよう、今後とも頑張っていきたいと思っています。